

会報

No. 112

令和7(2025)年3月15日

<https://www.library.pref.kyoto.jp/k-lib/council>

京都府図書館等連絡協議会

事務局

京都市左京区岡崎成勝寺町

京都府立図書館内

TEL (075) 762-4655

<目次>

1面

・南丹市立図書館のオーサービジット(著者訪問事業)について(南丹市美山図書室)

2面

・歴彩館と京都府立大学との連携事業「府大生∞歴彩館 コラボで探る京都学」について(京都府立京都学・歴彩館)

3面～4面

・北部研修報告(舞鶴市立西図書館)
・中部研修報告(京都市東山図書館)
・第三十三回京都図書館大会を開催しました(京図連協事務局)

南丹市立図書館の オーサービジット (著者訪問事業)について

南丹市美山図書室 北村多美子

南丹市立図書館では読書活動推進を目的として、著名な作家や郷土ゆかりの作家を小中学校や生涯学習施設等に招き、児童・生徒・市民が直接交流する機会を設けるオーサービジット事業に取り組んでいます。

今年度は絵本作家たなかひかる氏をお招きし、「学びの南丹『たなかひかるさん絵本ライプ ことば×ことば』と題して実施しました。たなか氏は、はじめて描かれた絵本「ぱんつさん」で第二十五回日本絵本大賞を受賞され、その後も出版される絵本が次々と受賞されている方です。漫画家、お笑い芸人の顔も持ったなか氏の絵本は、シュールな雰囲気の特徴で「ねこいる!」「すしん」などがとても人気です。

令和六年九月十六日に一般の方対象に美山町の丹波高原国定公園ビジターセンターで、翌十七日には午前中に美山小学校、午後は美山中学校で実施しました。費用は共催者の青少年育成協会からの負担金とふるさと納税企業版

による寄付金を活用しました。一般向け講演の定員を五十名程度として募集したところ、すぐ定員に達しました。

一般向け当日。絵本の読み語りが終わると、いよいよ「ことば×ことば」ワークショップの始まりです。当日参加者が〈好きな食べ物〉を記入して入れた箱から一枚、あらかじめスタッフが用意した動詞・形容詞を記入した紙を入れた箱から一枚、それぞれたなか氏が引き、引いた紙のことばとことばを組み合わせ、そこから連想する絵を即興で描かれます。その様子をプロジェクターでスクリーンに映して参加者の皆さんに楽しんでもらいました。できあがった絵はその元となった〈好きな食べ物〉を書いた参加者にプレゼントされました。

たなか氏独自の視点で描かれた絵は、ひとひねりされています。例えば、名詞「ブロッコリー」と動詞「泳ぐ」を掛け合わせた場合、ブロッコリーが泳ぐ場面を想像しがちですが、水泳大会後のブロッコリーが表彰台に上がり、お祝いのマヨネーズを浴びている絵が出来上がりました。ワークショップ後に「当たり前ものを描いてもつまらないでしょ」と、たなか氏はおっしゃっていました。

翌日は学校を訪問しました。授業の

一コマと聞いたたなか氏は、小学校では物事の見方を教える授業として進められました。例えば、「牛」のイメージを問いかけて、児童からいろいろな方向から牛について考えた意見を聞き取ります。その意見を元に即興の絵を描いて、人は一つの考えに凝り固まってしまうが、物の見方はいろいろある。すべての考え方を認める・肯定することが大事と教えてくださいました。中学校では、思春期の生徒たちが反応してくれる心配されていました。が、絵本「ねこいる!」の読み語りを大いに楽しみ、ワークショップでは、「給食」や担任の先生の名前など中学生ならではのことばから、楽しい絵の



数々が描き出される様子を楽しみました。生徒たちは積極的に発言し、質疑応答ではたなか氏の回答を真剣に聞いていました。

たなか氏の落ち着いた人柄もあり、一般向けではお子さん連れのご家族が多かったのですが、皆さん笑顔で楽しまれていましたし、学校でも児童・生徒が和気あいあいとした雰囲気の中、絵やお話を楽しみながら学んでくれました。プロフェッショナルの方に直接出会い、会話した経験が彼らの心の糧になり、何か困難に直面した時に、それを乗り越える力になれば、そして、いつか同じ道へと進む人が出てきたら良いかと期待しています。



歴史館と京都府立大学との 連携事業「府大生∞歴史館 コラボで探る京都学」について

京都府立京都学・歴史館 合田 淳

京都府立京都学・歴史館は、旧京都府立総合資料館から新館として建て替え、建物の一部は、京都府立大学も使用しています。館内には京都府立大学の附属図書館と文学部の研究室があります。特に、歴史館の資料を提供する京都資料総合閲覧室と府立大学附属図書館は、同じフロア（歴史館の二階）にあつて、学生さんを含め、広く一般の方々にも、ワンフロアでスムーズにサービスをご利用いただけます。

歴史館と京都府立大学では、毎年共同で事業をおこなっています。それが、「府大生∞歴史館 コラボで探る京都学」です。京都府立大学文学部の三つの学科の学生・大学院生・教員と歴史館のコラボレーション企画で、「日本・中国文化学科」、「国際文化交流学科」、「歴史学科」の各学科独自の視点から、歴史館の所蔵資料を中心に選定して展示解説を書き、歴史館の一階にある展示室でその成果を展覧会として紹介（展示）しています。

今回のコラボ展の展示期間は令和六

年十二月十四日（土）から令和七年一月七日（火）で、少し前に終わってしまつたところですが、もう七回目を迎えました。

三学科の展示の中でも、歴史学科の授業「日本文化史研究」は、週一回、一年間の授業の成果として、じっくり準備し、展示を作り上げます。歴史館の職員も要請に応じて授業に参加し、大学の先生方と一緒に学生さん達にアドバイスをしていきます。

四月の授業開始、まずは顔合わせと、班分けです。歴史学科の展示は、まず全体の統一テーマを決定し、その統一テーマに合うミニテーマを班ごとに決めて、各班でテーマに合う資料を選定していきます。歴史館の職員も、古文書、行政文書、古籍籍・図書・雑誌、それぞれの担当者から資料の紹介と、探し方、資料原本の扱い方などを説明します。

各班のテーマ選定は毎年難航します。よさそうなテーマを思いついても、そのテーマに合う資料がなければ展示はできません。また、ありきたりなテーマ設定と資料選定にしても、面白みがありません。テーマとして面白く、かつ展示に相応しい資料がないと、成立しないのです。当館職員も、テーマに合う資料があれば、助言します。

展示する資料を求めて、色々な資料を手にとって確認したり、当館のデジタルアーカイブで公開されている画像をチェックしたり、はたまた探したものの資料がうまく見つからずテーマ自体を変更したり、悪戦苦闘……。

苦労の末、夏休み明け頃には、テーマと展示する資料が確定しました。ここまでくると大詰めです。展示する資料の大きさを測って、展示ケースの中での配置場所を検討します。そして、キャプション（展示解説）の原稿を書いて読み合わせ、文章におかしな箇所がないか、みんなで確認します。

キャプションの原稿が出来たら、ノリ付のうすい発泡スチロールパネルに、印刷した原稿を貼っていきます。この作業は楽しい工作のようなもので、毎年和気あいあいとした雰囲気が進みます。

キャプションのサイズに合わせてパネルを切り出していくのですが、パネルは厚さが数ミリあり、カッターナイフでそこそこ力を入れなければ切れません。慣れた職員でも、失敗すると指を切ることがある作業。歴史館スタッフは、学生さんがケガをしないか、内心ヒヤヒヤしながら見守ります。

そして十二月、コラボ展オープンの数日前。いよいよ、事前に描き出して

おいた配置図に沿って、展示室に資料とキャプションパネルを設置していきます。

展示資料保護のため、明るさを抑えた薄暗い展示室の一角に、一年をかけて自分たちで取り組んだコーナーが出来上がり、淡い光を浴びて浮かび上がっています。その様子を眺める喜びは、いかほどのものでしょうか？

展示期間自体はそれほど長くはありませんが、展覧会を作り上げるための学びと、実際に完成させた経験が、学生さん達にとって実りの多いものとなることを願っております。



令和六年度京都市図書館等 連絡協議会実務研修会 (北部会場)(報告)

舞鶴市立西図書館 山口 麻夕

令和六年十二月四日(水)に、レファレンスをテーマとした京都市図書館等連絡協議会実務研修会が、宮津市福祉・教育総合プラザで開催されました。

講師には、二〇〇五年から二〇二一年にわたって国立国会図書館人文総合情報室でレファレンス司書として従事されていた小林昌樹氏をお招きし、「レファレンスの技法と新ツール」と題してご講演いただきました。

小林氏は、近著『調べる技術』『もっと調べる技術』を刊行されています。これらの本の目的は、今まであまり共有されてこなかったレファレンスのコツを、誰もが使えるようにすることです。経験のある司書が無意識に使っているような技法が、わかりやすく紹介されています。今回の研修では四つの事例を通して、ネットの情報源を用いたレファレンスのコツを教えていただきました。

例えば、『ファーストシユーズ』という欧米の習慣についての文献がほし「。」というレファレンスの調査をする

際、普通の雑誌記事検索ではファーストシユーズに関する文献は見つかりません。そこで、雑誌販売サイト「Fujisan.co.jp」の記事索引として使えば、ファーストシユーズについての記事が出てきます。これに気づくためには、数ある雑誌検索ツールが、どのようなジャンルが得意なのか予備知識を持つておくことが大切です。

また、『書籍館』という言葉はいつ頃使われなくなったのか」という事例も上げられました。言葉の初出に関しては、「日国」などのレファレンスブックに見ることができませんが、廃語の時期を調べられる本はありません。しかし、雑誌記事索引データベース「ざっさくプラス」で、言葉の使用頻度が棒グラフで表示されることを知っていれば、ある程度のトレンドを調べることができます。また、二〇二三年に開発された国立国会図書館の「Ngram viewer」でもキーワードの出現頻度を折れ線グラフで見ることが出来ます。

このようにネットの情報源を有効に活用するため、どんなデータベースやサイトがあるのかを知っておくこと、さらにそれらの得意ジャンルや収集している年代など、特徴を把握しておく

ことが大切です。そのためには、待ち時間などに汎用性の高いネット情報源を実際に使うこと、ベテランと新人を同じシフトにして技術を継承すること、事例検討会を行うことなどを提言されていました。

以上に挙げた例のほかにも、すぐに業務に生かせる様々なコツを伝授していただき、大変有意義な研修となりました。

令和六年度京都市図書館等 連絡協議会実務研修会 (中部会場)(報告)

京都市東山図書館 井山 暁子

「チャットGPT」の発表以降、「AI」の存在がとて身近になりました。AIが進化し、将来は図書館業務においても、大きな影響をもたらすのではないかと言われています。その活用方法への関心から今回の研修を企画しました。

講師は、株式会社カーリル代表取締役でエンジニアでもある吉本龍司氏です。吉本氏は図書検索サイトでおなじみの「カーリル」を運営し、図書館運営システムや電子書籍の技術開発にも携わっております。

講義の前半では、「生成AIと公共図書館」と題して、検索の分野を中心に、書誌データ等の学習をしたAIが蔵書検索において関連のキーワードを手助けしたり、書影をベクトル化することにより、「猫が沢山描かれている表紙」の様な表紙の「印象」からも検索することが可能になるなど、従来の図書検索から更に進んだ検索ができる事などの活用例の紹介がありました。しかし、AIの学習が発展途上の現在では、内容に不正確な場合もあること、AIは主に民間主導で進められているので、得られる情報に限りがある場合があり、よりの確な情報を提供するためにもAIの情報に加え図書館の情報と繋ぐなど、図書館が今後考えねばならない課題なのかもしれません。

後半のワークショップでは、ネット上のサービスを使得、地域資料とAIをどのように組み合わせるかを実際に操作しながら体験しました。講師の地元でかつて発行されていた地域資料を用いて、①資料をスキャン②OCR処理(テキストデータ化)③全文検索が可能に④「地域にある地蔵について教えて」と質問すると生成AIにより得られたデータから回答され、資料の内容の検索や編集が可能であることを体験しました。



これを踏まえ、今後の公共図書館への期待として、既存の資料を今後に残す事に加え、文字資料として残りにくいネットやSNSで発信された地域情報や持続不可能になる可能性を持つ地域や会社、団体・個人の保存先が無いデータなど、消えてしまう情報の収集と提供など地域資料におけるAIの活用は大きな可能性を秘めているのではないかと言うお話でした。参加者からはAIの活用により様々な機関の発行物やチラシなどを資料化したり、紀要類の検索などに活用できるのではないかなどの意見が出ました。

今後も様々な変化がある分野であるので、その動きを注視していきたいものです。

第三十三回京都図書館大会を開催しました

京図連協事務局 原山 弘子

令和六年十一月十八日(月)に、第三十三回京都図書館大会を綾部市・あやテラスホールで開催しました。五年前ぶりに京都府北部での開催、また綾部市で初めての開催となり、約百名の参加者が会場に集いました。

今大会は、「地域資料の拠点たる図書館へ」をテーマとし、基調講演では京都産業大学客員教授の園田俊介氏をお招きし、「地域資料の収集から広がる公共図書館と地域とのつながり」と題して、愛知県津島市立図書館長としてのご経験をもとに公共図書館における地域資料の収集・保存・デジタル化・発信・継承についてお話いただきました。

事例発表では、京都府立京都学・歴史館資料課の楠久美氏より歴史館における京都関係資料の収集・整理等について、続いて京都府立丹後緑風高等学校校久美浜学舎探究・広報部学校図書館司書、edit Tango所属の伊達深雪氏から高校生によるウィキペディアを活用した地域資料の活用・発信やウィキペディアタウンの取り組みについて、神戸大学情報管理課電子情報

グループ専門職員の守本瞬氏からは、阪神・淡路大震災後まもなくに開設された震災文庫での資料の収集や保存、デジタル化について、ご報告いただきました。フリートークでは発表者四名に登壇いただき、オンライン上に投稿された質問を会場のスクリーンで共有しながら、ご回答いただきました。

会場となったあやテラスには一昨年もオープンした綾部市図書館が入っており、大会後には図書館職員による図書館見学ツアーが開催されました。汽車型の紙芝居書架や赤い屋根のおはなしのへやほか、随所に魅力あふれる図書館をお楽しみいただきました。また、大会協賛企業による企業ブースも設けられ、休憩時間や大会後には多くの方にブース展示をご覧いただきました。

大会の様子については、本大会でもオンライン上での後日配信を実施し、多くの方に視聴いただきました。

大会アンケートでは「ご登壇の皆様が地域資料への真摯な思いに触れ、胸が熱くなりました」「館種の違う、各々のお話をきかせてもらって興味深かった」といった感想をいただきました。

Ⅱ会報はホームページに掲載Ⅱ

京都府図書館等連絡協議会のホームページに過去の会報も掲載しています。御利用ください。